

ミャンマー難民キャンプ 医療救援活動から帰って

長谷川 昭一

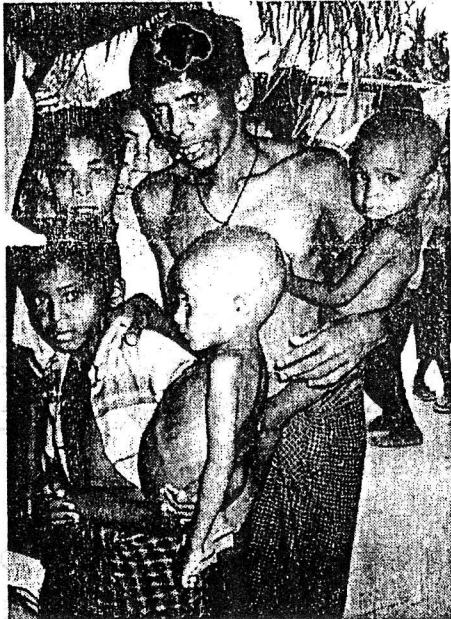


はせがわ・しゅういち
1956年北海道生まれ。88年新大医学部卒。内科医。新津市の下越病院ほかに勤務の後、今年4月から退職して海外医療活動に従事。一時帰国後、7月中旬からパキスタンへ。

私は五月八日から六月十二日まで、AMDA（アジア医師連絡協議会、本部岡山市）から派遣され、バングラデシュのミャンマー難民キャンプで医療活動をしてきた。以下われわれの活動を通して現状を報告したい。

栄養不良の子供たち

なお日本からの手を



難民キャンプの父子。子供たちは栄養不良に陥っていた＝ミャンマー、筆者撮影

もん
虫えん
生まん
寄まん

のビニールで覆っただけの小屋が続き、便所や井戸も少ないので非常に厳しい環境となっていた。
診察してみても感じたのは、子供の栄養状態が驚くほど悪いということであ

る。おなかやパンパンに膨れた子供が半分以上はいる（がくせん）とした。また、ほとんどの子供が寄生虫を保持しており、貧血や皮膚病も多かった。
こういう状況でAMDAとしては特に寄生虫駆除と衛生教育の分野を担当し活躍する日本人がかかる団体はありで、残念であった。

日本兵の帰還に温かい対応を示したというミャンマーに、一日も早く真の平和が来ることを切に望む。その中で最大の援助国である日本の果たす役割は非常に大きいと思われる。

要だからである。駆虫薬は必ずその場で飲ませ、衛生教育の教材は字の読めない人にもわかるように大型の絵を使ったAMDA独自のものを用意した。
私が滞在中、診察に訪れた難民は六千人を超え、現在一万人に迫っているところである。今後のプロジェクトは、少なくとも年内は続ける予定である。
世界の最貧国の一つであるミャンマーとバングラデシュ。サイクロンなどの自然災害が起きやすい環境、そして雨期の間（六一八月）における伝染病流行の恐れなど、これをとっても手断す許さない状況である。熱帯の中、さまざま援助団体がよく頑張っていたと思ふ。ただ現地でも活動している日本人がかかわる団体はありで、残念であった。
第二次大戦中日本軍に占領されたミャンマー、戦後

私は五月八日から六月十二日まで、AMDA（アジア医師連絡協議会、本部岡山市）から派遣され、バングラデシュのミャンマー難民キャンプで医療活動をしてきた。以下われわれの活動を通して現状を報告したい。
ミャンマー軍事政権の迫害を受けて脱出した難民は、今年一月から急増しついに二十七万人を突破した。このことを憂慮したAMDAは、バングラデシュ、日本両国からなる医療団を編成し、四月から現地で医療活動を開始した。
キャンプは、国境であるナフ川からバングラデシュ南部の都市コックスバザールにかけて、約六十キロの間

に散在していた。特に国境沿いの新しいキャンプで、日本でよく使うごみ袋

活動の問い合わせなどはAMDA本部、電話0862(84)7676へ。
(新潟市・医師)